Ⅰ：宗教現象としてのキリスト教

＜前回＞　聖なるもの（→O）

１．「O」（信仰の対象）＝「聖なるもの」（das Heilige、the Holy）

２．信仰対象の多様性　→　宗教現象学（宗教類型論、宗教経験の構造論へ）
　ファン・デル・レーウ『宗教現象学入門』（東京大学出版会）

３．聖書の神・キリスト教の神
　　日常的・俗的なものから際立った力／意志（自由の主体）／形態／名称（名）
　聖書的宗教は、神の存在を信じるという点で有神論であり、その神は、人格神である。
　　究極的関心を可能にするほどの力で人間に関わり、コミュニケーション可能な意志的な存在者（意志・形態・名）、「神－人間」においてイニシアティブをもって振る舞う存在者

４．「形態」：神の超越と緊張を生じる。
　　偶像禁止、不可視的であり（見えない、見てはいけない）、霊的。

５．「人格」（力／形／意志／名という諸条件）：コミュニケーションの主体となりうる存在者

６．近代的な単一的主体概念への批判、人格の多元性
　　「神」の本性の多元的理解？　実体形而上学的ではない神の人格性！

７．神（広義の）と人間とは相関関係
　　伝統的な神の似像性（Imago Dei）の教説とフォイエルバッハの投影説の分岐

第４講：聖なるもの（２）―宗教経験の動態―

２　オットーの聖なるもの

１．現代宗教学において、諸宗教の信仰対象が「聖なるもの」と概念化されていることについては、前回の講義で説明した通りである。聖なるものの第一条件は、非日常的圧倒的な力、究極的関心を引き起こすような力が経験されることであった。本講義では、この「聖なるものの経験」の構造について、さらに立ち入った考察を行ってみたい。

２．まず、第一に参照すべきは、ルドルフ・オットーによる宗教現象学の古典的名著『聖なるもの』の議論である。オットーは近代以来の宗教の合理的解釈（理神論、宗教の倫理化など）に対して、宗教の固有性の解明をめざした。それを通して示されたのが、宗教経験の核心をなす聖なるものの「ヌミノーゼ」的非合理的な性格である。宗教経験は、その後に図式化を介して、合理化されることになる（→永遠、遍在、全知全能などの神の諸属性）。

３．オットーは、非日常的力の経験をいわば構造分析することによって、宗教経験に現れた合理化の一歩手前の固有の特徴を顕わにしようとする。この結果得られたのが、次の二つの力の両極性である。

戦慄すべき秘義（mysterium tremendum）―魅する秘義（mysterium fascinans）

聖なるもののパワーは、近寄りがたい畏怖すべきものとして、つまり反発し斥ける力として経験される。聖書の神について言われる、偶像禁止、神の名を唱えることの禁止は、この神の恐るべき側面に対応している。しかし、聖なるものは畏怖すべきものにとどまらず、同時に人間を強力に引き寄せる魅惑的なものとして、つまり引力としても作用する。オットーは、聖なるものの経験が、引力と斥力の同時性（力の合成）という仕方で成立していることを指摘する。圧倒的な二つの力の合成にこそ、聖なるものの経験の核心がある。

4．聖なるものの両極性は、神について、「光・平和・祝福・恩恵」と「闇・破壊（災い）・呪い・罰（怒り）」といった相対立する特性が同時に語られるという点から、確認できる。

戦慄すべき秘義と魅する秘義　→　図式化　→　神の怒りと神の愛

5．「6:1　ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱいに広がっていた。2 上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。3　彼らは互いに呼び交わし、唱えた。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」4　この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。5　わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た。」6　するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鋏で取った炭火があった。7 彼はわたしの口に火を触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたので／あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」」（イザヤ 6.1-7）

「光を造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。わたしは主、これらのことをするものである」（イザヤ 45.7）　　cf:詩 90、サムエル記上 2.6

5．しかし、ヌミノーゼの経験の両極構造は、聖書の宗教だけなく、さらに一般化可能である。たとえば、日本の宗教伝統における、「祟り神」と「共同体を守護する氏神」の二重性。

「尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き者を迦微とは云なり。」（本居宣長）

Q：日本の宗教経験において、「祟り神」が「氏神」に転換されるメカニズムはどのようになっているか。

6．対立する力の同時性（合成）という事態は、聖なるものの経験（宗教経験）においてきわめて顕著であるが、類似の事例として次のものが挙げられる。

・お化け屋敷の魅力（？）：怖い、けど見たい。見たい、けど怖い。

・カリスマ的人物：魅力的なだけではなく、近寄りがたい雰囲気が大切。

カリスマとは、本来、神から特定の人間に与えられた特別な賜物（力・能力）を意味し、まさに宗教の教祖などはカリスマ的人物の典型である。しかし、カリスマ的人物は、政治家、芸術家など、狭い意味での宗教以外の世界にも存在する。

Ｑ：日常生活の中より、ヌミノーゼ的カリスマ的なものの事例を挙げよ。

３　エリアーデとヒエロファニー

１．聖なるものの第一の特徴は、非日常的な力、つまり、非日常性（めったに経験できない、通常の経験とは異質な）であった。しかし、非日常的なだけでは、超越的なだけでは、安定した宗教経験は成り立たない。なぜなら、過度に非日常的な聖なるものは、次のようなステップを経て、最終的には死に至るからである。

遠ざかる最高神（隔絶神）　→　日常生活との関連の喪失　→　忘却　→　神の死

２．この超絶的な神の遠ざかりの実例としては、次のものが挙げられる。

・ＹＨＷＨ（四文字神名）：神の名は聖なる名であり、みだりに唱えてはならない
→　発音の忘却（歴史的な背景は単純ではないが）

・「この三柱も神は、みな独神と成りまして、身を隠したひき」（『古事記』冒頭）
天御中主神の運命

３．「神の蝕」（ブーバー）→現代の宗教状況

「2 涸れた谷に鹿が水を求めるように／神よ、わたしの魂はあなたを求める。3 神に、命の神に、わたしの魂は渇く。いつ御前に出て／神の御顔を仰ぐことができるのか。4 昼も夜も、わたしの糧は涙ばかり。人は絶え間なく言う／「お前の神はどこにいる」と。5 わたしは魂を注ぎ出し、思い起こす／喜び歌い感謝をささげる声の中を／祭りに集う人の群れと共に進み／神の家に入り、ひれ伏したことを。6 なぜうなだれるのか、わたしの魂よ／なぜ呻くのか。神を待ち望め。わたしはなお、告白しよう／「御顔こそ、わたしの救い」と。」（詩篇４２）

４．したがって、神が神であり続ける（＝人間によって神として信仰され続ける）ためには、その非日常性（超越性）にもかかわらず、同時に日常性との関わりを保持し続けねばならない（内在性）。できれば、定期的に人間の経験可能な世界に顕れることが望ましい（儀礼、祭り）。

聖なるものが顕現するという現象（＝ヒエロファニー）についての古典的研究として、エリーデの宗教研究を参照しよう。

５．ヒエロファーの実例は、古今東西の様々な神話や宗教書に見いだされる。図解すると、上から下に降りてくる矢印（運動）として示すことが可能であり、この矢印は、具体的には、山、樹、柱、塔などによってイメージされる（　→　世界軸・図 1）。

「聖なる山、あなたのいますところ」（詩篇 43.3）

「10 ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。11 とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。12　すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。13 見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあな

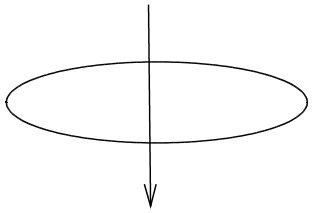
たの子孫に与える。14　あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。15　見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」16　ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」17　そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」」（創世記 28）

6．ヒエロファニーには、次のような構造が伴っている。

(1) 世界の三層構造（三層構造世界観）

(2) 世界軸の周辺におけるコスモスの生成（カオスからコスモスへ）

図 1



7．三層構造世界観：「天－地上－地下」　→　伝統社会のコスモロジー

Q：これによって、「使徒信条」に語られたキリストの動きを図解せよ。

8．ヒエロファニーの場は世界の中心であり、この中心の周りには人間の居住可能な空間（コスモス）が生み出される。これは、世界各地に見られる創世神話が語る通りである。

原初のカオスと、神の英雄的偉大な行為によるコスモスの創設。

ヒエロファニー

↓ 英雄神のドラゴン退治

カオス　→　コスモス（秩序ある空間）

ドラゴン　（古代バビロニアの『エヌマ・エリシュ』）

9．イザナミとイザナキによる「国生み」神話（『古事記』）

天の沼矛

10.「1　初めに、神は天地を創造された。2　地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。」（創世記 1）

11. ヒエロファニーで生じるのは、聖（非日常性・超越性）と俗（日常性・内在性）の緊張関係であり、ここから宗教を構成する儀礼や神話・思想などが生み出される。

古代イスラエルの宗教：聖と俗との緊張　→　神殿神学、祭司と預言者と知者

12. ヒエロファニー論は様々な事例に応用可能である。

(1) コスモス・秩序の三重構造（コスモスは三重の構造体となる）：国土－都市－建物

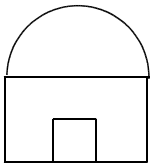
古代イスラエル：

パレスチナ（乳と蜜の流れる土地）、エルサレム、ソロモンの神殿

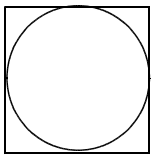
日本：神の国日本（日本列島）、都（平安京）、皇居・御所

(2) 教会建築のコスモロジー：聖と俗、生と死の空間構造

図２

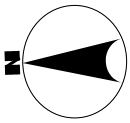


正面図



平面図・上から

円から四角、西から東



(3) 都市のコスモロジー：都の選定は、機能性と意味性の二つの観点から行われる。

平城京、平安京、江戸について、それぞれの意味性（コスモロジー）を分析せよ

四神相応

＜参考文献＞

１．オットー　『聖なるもの』岩波文庫

２．宮家　準　『宗教民俗学への招待』丸善ライブラリー

『生活のなかの宗教』ＮＨＫブックス

３．中村生雄　『日本の神と王権』法蔵館

４．マックス・ウェーバー　『支配の社会学』『宗教社会学』創文社

５．エリアーデ　『聖と俗』法政大学出版会

『神話と現実』せりか書房

６．大林太良編　『世界の神話――万物の起源を読む』ＮＨＫブックス

７．R.E.クレメンツ　『旧約聖書における神の臨在思想』教文館

８．馬形宗夫　『大聖堂のコスモロジー』講談社現代新書